美作大学・美作大学短期大学部紀要
2012, Vol. 57. 79～86

報告・資料

イメージ画における「道」が象徴する内容に関する考察
―大学生を対象とした「風景構成法」の実施に関する研究から―

Some characteristics of the " road "in drawing method
from studies on Landscape Montage Technique

和　田　百合子

キーワード：イメージ画、大学生、学生相談、風景構成法、道

1．研究の背景

風景構成法は、描画法であるので、非言語のメッセージを豊富に含み、心理検査の側面と同時に治療的側面に活かせるという性質を持っている。

皆藤（１９９４）は「風景構成法は、投影法のなかの描画法に属する。したがって、自由度が高く、客観性は低い。これが風景構成法の大きな特性である。」と述べ、「自由度が高く客観性が低い技法ほど心理療法のなかで多く用いられている」と言及している。

筆者は、大学の学生相談室で学生の相談に応じる業務に就いているが、最近は精神的な症状を呈していたり、行動面で健康さを欠いている状態を呈したりしていても、自覚的には悩みをもっておらず、悩みを語る言葉が充分にでてこない学生を目の前にして困惑することが多い。

風景構成法は、学生相談の事例研究でも活用されているものであり、面接の中で活用すれば自分の悩みを充分に語る言葉がでてこない学生の内面の理解に役立つし、学生が自分自身の内面を理解することにも役立つ。一方、風景構成法をその学生の理解の素材にしようとすると、その活かし方がカウンセラー自身の感覚や経験に大きく依拠してしまうという懸念を描画経験が少ない筆者は持たざるを得ない。

イメージ画を活用する場合、たとえ読み手が経験豊富であっても、作品の描画が多くの情報を含んでいるということと、その描画から学生の内面をカウンセラー側が理解するということには、一義的な関係はないので、限りないほど豊かな情報が広がっているにもかかわらず、それを学生の内面の理解の手助けの素材にするためには、カウンセラー側が濃厚な凝縮した視点を入れざるを得ないという２律背反、表裏一体の関係がある。

皆藤（１９９４）の風景構成法に関する以下の論述は、イメージ画における上記の２律背反にも当てはまると思う。「風景構成法における客観的指標が基礎研究によっていかに多く見出せたとしても、それが絶対性をもつわけではないし、また風景構成法の特性を網羅するわけでもない。そうした指標は実際の治療場面ではしばしば無力である。心理療法において、治療状況はクライエント－治療者関係のなかで刻々と変化するからである。クライエント－治療者関係、および状況要因なしに作品を治療的に理解することはできない。しかし、だからと言って、そうした客観的指標は不必要であると判断することには大きな誤りがある。実際、客観的な指標なしに作品から描き手のメッセージを汲みとってゆくことが困難なことも事実である。」

和田ら（２０１１）は、学生相談室を利用した学生たちとグループディスカッションを行い、悩んでいる状況と心の悩みを克復したあとの状況をイメージ画で表現をしてもらった所、悩んでいる真っ只中では、悩みは形をもたないが、一定の解決を見出したあとでは、「道」が出現するケースがあり、筆者は、イメージ画

における「道」の表現が学生の内面の理解に役立つのではないかと関心を持つようになった。

大学生を対象としたイメージ画における「道」の表現からどのような視点で描き手のメッセージを汲み取ればよいのだろうか。イメージ画における「道」の表現と風景構成法における「道」の表現の位置関係は、決して、平行して置換できる関係ではない。そのことを前提とするのであれば、風景構成法における「道」の表現の研究成果は、自由画における「道」の表現をどう見るかの視点を探求する課題に役立つと考えている。

2．目　的

本報告では、イメージ画における「道」の表現を理解するための視点を探求することを目的としている。風景構成法とイメージ画に関する研究を取り上げて、イメージ画における「道」の表現を理解するための視点を考察する。イメージ画における「道」の表現を理解するための視点を探求し、自分の心理的な悩みを言語表現しにくい学生の内面理解に取り入れる試みとする。

3．方　法

本報告では、主に風景構成法を用いたイメージを扱う研究や論述の中から学生相談業務の中で実施されたか、あるいは大学生を対象として実施された研究や論述を取り上げて、各研究ごとにイメージ画における道の理解に活用できる視点を考察し、最後に総合的な考察を行う。

以下２つの領域から文献を取り上げる。①皆藤（１９９４）から道に関連すると考えられる研究を取り上げる。②主に学生相談ないし、学生を対象として実施された研究を取り上げる。当然、取り上げる文献によって、着想点は異なる。２０００年前後のものを対象としたが、年代や研究雑誌にばらつきがあるため、本目的に関する研究を網羅的にとりあげる研究は別稿にゆずり、本報告は、中間報告とする。

以下、本研究で取り扱う「道」を道と表現する。

4．結　果

4－1　皆藤（１９９４）における道の考察

皆藤（１９９４）は、中・近景群の配置の様相について結果をまとめた記述において、グリュンバルトの空間図式との関連は、バウムテストと風景構成法とでは異なるという。「少なくとも、風景構成法作品は紙面という空間のなかに風景という空間がある、あるいは紙面空間が描写プロセスを経るなかで風景空間に変容するという空間の特徴を備えていることからして、空間図式を単純に援用することはできないと思われる。さらに、たとえばバウムテストでは木が紙面のどの領域に定位されるかを空間図式から見ていくのであるが、風景構成法では風景が描かれ、それが紙面の相当な領域を占めるわけであり、空間図式の用い方はバウムテストとは当然異なってくる。空間図式は、本来人間の位置を基準にして考えられたものであるから、その図式に風景空間をどのように当てはめるのかが大きな問題になるだろう。」

道に関しては「大景群の最後の項目である道は、構成プロセスからみると、前三項目によって描かれなかった残された空間を埋めてゆく意味を担っており、それは前三項目との関連を意識しながら、遠近感を意識して視点場を定めながらおこなわれる、意識的色合いの濃い作業であると言える。この辺りを手がかりとして、描き手の道の描写を共にたどりながら、その内的状態を汲みとってゆくことができる。」と論述している。

では、イメージ画における道は、どうであろうか。上記の風景構成法における道に関する論述をそのままにイメージ画における道に当てはめることはできない。

イメージ画における道を風景構成法の道と比較すると、１）大景群の他のアイテムと関連しないで描く２）道を描く順序は他のアイテムとの関連では決められていないという基本的な違いがあるからである。

空間図式をバウムテストの解釈に応用するときは、木が人そのものを表現すると想定されているが、道はその人そのものを表現するということは前提とされていない。しかし、筆者が経験したケースでは、道は描

き手が置かれている状態、歩んできた過去の状態、歩もうとする未来の状態を空間図式に寄り添う形で表現していた。(和田ら２０１１)。

道の位置に関しては、今回取り上げた文献の中でも、道が上にあがるときに、クライエントの内面で前向きな変化がおきているというクライエント自身の発言も報告されている。吉田（２００７)。

このようなことから、イメージ画における道と空間図式の関係は、バウムテストのようには、空間図式を応用できないが、風景構成法の道よりは、イメージ画における道の方が、空間図式の中の内向的な世界か外交的な世界かの軸と過去か未来かという２軸を、応用しやすいのではないかと想定することができる。

不登校児21人を対象にした研究では、道を歩く人物の運動に関し、「人物像の運動に関しては『静的運動』の比率がきわめて高かった。(「動的運動は、『散歩』『家に帰る』など，静的運動は『立っている』『～を見ている』『日向ぼっこ』など，を意味している」)同じく宮脇の報告では、『静的運動』は小学一年で最も多く39％を占め、小学二年で著しく減少し（14.4％)、その後多少の増減はあるものの減少傾向を示し、小学六年では8.9％と最も少なくなる（宮脇１９８３)。つまり、学年が上がるにつれ、おおむね減少傾向を示すのだが、本結果はそれとは対照的で、『静的運動』の比率は42.9％ときわめて高い数値を示した。」

道を歩く人物の人数に関する論述については、「単数描画が圧倒的に多いことがわかる。健常児を扱った先行研究では、小学一年生を除いて単数描画の比率は50％を超えることはないのに対し（宮脇　１９８３)、本結果はきわめて高い出現率を示している。」と述べ、不登校を体験している児童では人の「静的運動」と「単数描写」が増えていると指摘している。

描き手の孤独な状態が人の単数に反映された点は、和田ら（２０１１）の中でも違和感のない所である。

学生相談においてイメージ画を理解しようとするときに、数量的視点や対象者を幼稚園から大学生までというような長期発達的にとらえる視点は、欠けやすいと考える。学生の精神的な発達、成長は重要な課題であるが、学生相談では入り口と出口が決まっている短期間の独特な時間を活かした支援が行われるからである。自分が接する事例を長期発達的な研究や数量的な研究と比較する視点も重要と思われる。

４－２　学生相談ないし、学生を対象として実施された研究における道の考察

浅田（２００８）は、風景構成法を用いて、描画法の中で起きる「多様な関与体験を実証的に検証することを通じて、描画法に現われる基礎的現象としてのセラピストの『主体的関与』について考察」した。被験者は大学生である。「被験者33名が、同一の風景構成法作品に対して異なる状況の３段階に分けて関与する調査を実施した。」「描画への関与において、被験者は段階により特徴的に偏った関与体験をし、また、被験者のなかにも段階ごとにその在り方を変化させる被験者と、彩色に一貫して着目する被験者がいることが明らかとなった。このような多様な関与の形は、実践場面ではさまざまに重複して体験される。」と述べている。

浅田の研究からは、イメージ画を実施する側の主体的な関与の視点を考えさせられる。

具体的には１）学生相談のどの展開点で、描画を提案するか２）イメージ画を提案するのか風景構成法を提案するのか３）前者であればどのような指示を加えるのか、加えないのか等が考えられる。

描画の結果からクライエントの思いをどう汲み取るかということ以前の段階で、カウンセラーの主体的な関与がどのように行われているかを問う視点である。

福留（２０１０）は、イメージには性質の異なる二つの領域があると指摘している。「イメージを受容的に眺めていると自然に展開する領域」をイメージの「自律領域」と呼び、「意識的な意図をもって操作を加えることのできる領域」をイメージの「操作可能領域」と呼んで、クライエントへの働きかけを記述している。「心理療法で利用するイメージ過程と夢見との大きな違いは、イメージを体験しながら、イメージ過程に介入することができる点です。険しい山をクライエントが軽装で登っているイメージが現れた場合、『このま

ま進んでも大丈夫ですか』とセラピストが声をかけることができます。もし危険を感じていなければ、『もう少し慎重に進んでみましょうか』と働きかけます。危険を察知していたら、『この場面で、どのようにしたら少しでも安全な感覚を感じることができるでしょうか』とイメージの中でできる工夫について問いかけを行います。危機を回避するための意識的な工夫をイメージ中で行うのです。」

福留の上記の論述では、クライエントは険しい山を登っており、道という言葉は書かれていないが、イメージ画に出現した道のイメージとしての特徴をどう考えるかという点を参考にできる。

描かれた道は、イメージの「自律領域」にあるのか、イメージの「操作可能領域」にあるのか、さらに、イメージの道にカウンセラーとクライエント双方が働きかけることによって、その領域は変化するのか。このような視点をもって、カウンセラーがイメージ画として出現した道を素材にクライエントの内面を理解していく可能性があるのではないかという視点を得ることができる。

松井ら（２０１０）は、風景構成法における彩色過程の研究を発表している。「重色の働きの背後には、『光や動き』を指向するこころの働きと『微細な差異・ニュアンス』を表現しようとするこころの働きがある」。

一枚の絵のなかのある部分への彩色が長時間おこなわれるのは、臨床的によく出会う事柄である。描画の後に、インタビューをすると確かにクライエントがそこの部分に多くの思い入れを行っていたことがわかる経験をすることがある。イメージ画における道の理解においても、重塗りに関する視点を活用できるのではないか。

中澤ら（２００６）は、発達心理学の講義を受講しようとしている学生を対象に発達、成長、成熟の個々のテーマを指定し、イメージ画を描いてもらう研究を行った。「対象に関して、発達、成長、成熟のいずれにおいても人が最も多く描かれた。学生が、これら3つの言葉を聞いて、対象としてまず思い浮かべられるのは人であるといえる。」人以外に描かれたものの割合は、刺激語によって異なっていた。

中澤らの研究から、イメージ画を実施する場が、学生相談の場であるか授業や調査研究の場であるか、場の問題を検討することができる。

刺激語によってイメージ画に描かれるものも変化する。道を描いてくださいと指示するときに、「あなたが歩む道をイメージしてください」と主語をつけた指示をするか、「あなたが未来に歩んでいる道をイメージしてください」と時制をどう指示するか等によっても道の表現が変化する可能性がある。

クライエントが表現しやすい指示をするだけではなく、組み合わせて実施すると、描きやすい指示、描きにくかった指示を比較することによって、クライエントの理解をすすめる手がかりを得られる。また集団で実施するか、対面の個人で実施するかという視点も検討しなければならない。

佐々木（２００５）は、風景構成法の研究方法に関して、従来分類されてきた、調査研究と事例研究と言う枠では、今までの研究を活かしきれないとして、新たな分類をしている。１つは、対象者による分類で、臨床的研究と、調査研究、もう１つの分類は、数量的な研究と質的な研究である。

佐々木の研究法の整理を活用すると、２かける２の４分野の研究があるということであるが、たとえば、本報告のように文献による研究を行う場合も文献数だけでなく、４分野のすべてから研究をとり上げることによって様々な視点を得られることへとつながる可能性がある。

佐々木（２００７）は、「風景構成法の描画プロセスの微視的な記述を用いて、風景構成法を読み取るとはどういうことなのか、また読み取りはどのように成立していくのかについて論じ」、「同一の描き手、同一の見守り手による複数回の描画を施行し、マルチメソッドによってデータを収集した。協力者は19歳の女性、大学生である。結果、「風景構成法には描き手の内的なテーマが顕れ得ることが明らかになった。」と報告している。

では、イメージ画における道には、内的なテーマは

あらわれうるのか。あらわれるとしても、内的なテーマの性質は、風景構成法と同様なのか、異質なのかという視点を検討することができる。次の山崖の２つの研究結果からは、風景構成法に描き手が内的なテーマを表現しうることには、川の存在が関連していることを考えさせられる。

山崖は、学生相談における蓄積された経験から道と川の交差の臨床的な意味に深い関心を寄せ、研究を行っている。山崖（２００５）は幼稚園年長児から大学生までの合計５３０名（男２２２，女３０８）に風景構成法を実施した。「男子と女子とではかなり異なった変化を示すことが確認された。すなわち，男子では『行く先がはっきりと示され』『道と川が交わっているもの』は小学校３年から上昇しながら青年期に至っている、一方，女子では思春期にいったん上昇するが，その後下降し、改めて青年期に向けて上昇することがわかった。」

山崖・笠井（２００６）は、大学生を被験者に風景構成法における「道」と「川」の描かれ方と自我同一性達成との関係について研究している。大学生男女が対象である。「『行く先が定まっているもの』については『道と川が交わっているもの』の方が『道と川に接点のないもの』に比して，自我同一性が達成されている度合いが高いということは当初の仮説そのものであり，十分納得のいくものである。」「いずれにしても，女子については大学生段階における風景構成法の『道の描かれ方』『道と川の関係』が自我同一性達成の指標とはなりにくく、男子については『道の描かれ方』『道と川の関係』をみることで自我同一性達成の状態を理解するのに役立つことが分かった。」

道と川の交差に関しては、皆藤（１９９４）も前述した研究で不登校を体験している対象者では、川と道が交わることがきわめて少ないと指摘している。

道と川の交差の研究から見ると、イメージ画の道が風景構成法の道と異なる重要な点は、

１）川が設定されていない

２）川が描かれたとしても、道との順番が設定されていない

という点であると考える。

先行研究から川は無意識的なものを道は意識的なものを描きやすいと広く考えられているが、イメージ画における道にも援用できるかどうか。また上記の２点の違いがイメージ画における道の見方と風景構成法における道の見方を大きく隔てるのではないかという視点が考えられた。

吉田（２００６）は、風景構成法は、描画法の中でもクライエントの語りを促しやすいと述べている。「描画法の中でも物語性が顕著であるのが風景構成法であると考えられ」、学生相談の中で、「通常、２枚以上描いた場合は、２枚目の質問段階を終えて、共に眺め、語り合った後、１枚目と２枚目を並べ、全体と各項目の変化、誘目される箇所など、気づいたことや連想されることを、現実の生活も考慮に入れながら、その学生と共に語り合うことにしている。」とその語らせやすさを活かした取り組みを紹介している。その１例の中で学生が、１枚目と２枚目の道の違いを以下に述べた発言を紹介している。「道については、Ⅲは上に延びて自分の考え方、やり方がかわっているのが表れている。」（Ⅲは、心理的な課題が展開をみた後に描いた風景構成法）

わからないときはクライエントに教えてもらうということは、学生相談においても大切であることに変わりはなく、クライエントに語ってもらうという方法から、道を理解していくことが可能であろう。

５．　総合考察

結果から、１）空間図式の活用　２）不登校体験との関連　３）道に関連する人の動き　４）道を歩く人物の人数　５）発達的な視点と量的な視点からの比較　６）実施者の関与の仕方　７）川との交差における道　８）描き手の性別　９）重塗りの視点が検討できた。

結果を２点に分けて考察する。

５－１　描画素材としての道を理解する視点

結果から、イメージ画において出現した道は、風景構成法のように、前３項目との関連から、意識された

表現としての道というものとは異なると思われた。

道と川の交差の研究に関連して、イメージ画の道が風景構成法の道と異なるのは、

1）川が指定されていない

2）川が描かれたとしても、道との順番が指定されていない

という点であると思われる。

また、道は、必ずしも大地の上に表現されるものとは限らない。高橋（２００９）が検討した大学生のケースは、「２０ｋｇ台という極度の拒食状態であったが、筆者と学生相談室で出会い、関わり、卒業していった。」このクライエントの最初の風景構成法の道は、他のアイテムと同様すべて、ばらばらに存在し、空でつながっている。

皆藤・川嵜・高橋（２００９）の中で川嵜はこの風景構成法を「アノレクシアの人に関して一般的によく言われていることですが、経験的にもやはり相当に妥当するなと思うことに、彼女たちが、女性性＝身体性＝母性といったものをサイコロジカルに否定している面があると思うんです。そのような側面がイメージ的に表象されると、母なる大地（具象性・身体性）を否定し、垂直的に上昇して父なる空（抽象性・精神性）の方に動く表象となる。何より、見ようによっては『構成放棄』ともみなされかねない個々の項目をこの人は『空でつなげた』と語ります。普通、個々の項目は大地の上に乗っているものでしょう。（中略。）この人は大地と空を区切る地平線を描かない。それで、すべてが空に浮かんでいるような印象の風景になっている。」と述べて、事例検討で皆藤とともに、クライエントが水の世界に生きる特徴を持つと指摘している。

筆者のカウンセリングでも、以前に出会った強度の強迫行動がある学生が、「首から上、精神だけで生きたい、首から下の内臓や体は要らない生き方をしたい」と願っていた事例を経験した。

イメージ画の道を理解する際には、道があるかないかだけではなく、道と大地との関係についても確認しなければならないと考える。

佐々木（２００７）の被験者は、研究者の前で６枚の風景構成法を描画していくのだが、後半になると１０個のアイテムを１画面に納めることに苦労したと語っている。

１０個のアイテムを指示されて、風景という３次元を紙面という２次元におとし、それを苦心して１画面に納めることで、内面の作業が苦しくも進められる。しかし、イメージ画では、道を思いつかなくて良い、描かなくてよい、川とともに描かなくてよい、という自由さの中で道が描かれている。イメージ画の道の表現には、様々な心の状態を象徴すると言われる10個のアイテムを１画面に納めるという心理的な作業をしなくても自由に描ける特性とその心理的な作業を促されないことで内面の作業が促されないという特性が表裏一体に構成されるのではないだろうか。この点に２つの描画の間で道からクライエントの思いを汲み取る視点の根本的な違いがあるように思われる。

５－２　見守り手としての関与に関する視点

結果から、実施者の関与の仕方という視点が見出された。１）学生相談という臨床心理の場であるか、一般の大学生の調査の場であるか２）集団実施が個別実施か３）学生相談の場合、どの展開点で、描画を提案するか４）イメージ画を提案するのか風景構成法を提案するのか５）前者であればどのような指示を加えるのか加えないのか、である。

最近は学生支援という言葉が頻繁に使われるようになった。学生支援は、すべての教職員が行うものである。これに対して、学生相談ハンドブック（日本学生相談学会５０周年記念誌編集委員会編、２０１０）では、「今日、我が国においては、学生相談および学生支援という言葉が高等教育機関における１つのキーワードとなりつつあります。学生相談という言葉の意味が広がりをもちつつありますが、それとともにその意味が拡散しつつあります。」と課題を投げかけている。

学生支援と学生相談の関係をどのように、位置づけることが、学生にとって最も活用しやすいものになるのか。同書では、学生相談・学生支援体制に言及して、「『日常的学生支援』（教職員が学習指導や窓口業務などにおいて自然な形で行う成長支援）、『制度化された

学生支援』（クラス担任や何でも相談窓口などの役割・機能を担った教職員による支援）、『専門的学生支援』（より困難な課題が生じた際に学生相談などの諸機関によって行われる専門的な支援）という3層によって構成される」3階層モデル（文末　図1－2）と介入の「対象、目的を想定していく」キューブモデル（文末　図1－3）が紹介されている。

第3層に該当するであろう学生が、最近は、さまざまな困難な状態にいるにもかかわらず、適切に言語で訴えられないことがあり、このような場合には、学生相談の専門性を活かした支援が欠かせないと感じている。

高石（2009）、渋川・松下（2010）においては、学生相談で出会う学生の心理的な特性が変化していることが明確に論述されている。渋川・松下（2010）は、学生相談場面で指摘される大学生の心理的な特徴に関する文献を概観し、「自己の多面化」と「自己側面の繋がりが失われ解離・断片化」をその共通項に挙げ、「多くの学生が潜在的に有した問題」と述べている。

解離・断片化している学生の内面を理解するには、意識的・無意識的双方の面からの理解が必要になる。このような場合に支援者側から見て、具体的にどのようにアプローチをするかをイメージする際に、3層モデルとキューブモデルを使用できると考えている。

学生相談で2種類の描画の道から描き手を理解しようとするときには、3層モデルとキューブモデルの中で、自分がどの立場でどの目標をもって、2人の間で描画を実施したのかという、カウンセラーの主体的な関与の視点を吟味しなければならないと考えられた。

たとえば、第3層に所属するカウンセラーが、現実的な進路の聞き取りを目標にして、「これからの進路をイメージして、道を描いてください」という描画を提案するとすれば、その選択自体に意識的な領域の話し合いを目指していることが想定され、そこに実施者と学生との関与のスタイルが反映されている。このこともイメージ画にあらわれた道を理解する視点として欠かせない視点であったということである。

文献の研究を通じて、イメージ画における道の表現を理解するための視点を整理することができた。視点の研究を深めることと、視点を取り入れた描画の実践を学生相談の中で活かすことが今後の課題である。

引用文献

1）浅田剛正（2008）：描画法におけるセラピストの主体的関与について　風景構成法を用いた関与の多様性の検討から．心理臨床学研究，第26巻，第4号，444－454.

2）福留留美（2010）：心理臨床の広場，第12巻，第2号，16－17.

3）古川裕之・皆藤章・松井華子・千秋佳世（2010）：研究開発コロキアム：報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：風景構成法における彩色についての研究，研究開発コロキアム：平成21年度 成果報告書，32-33.

4）皆藤章（1994）：風景構成法　その基礎と実践，誠信書房，29，31，50，52，54，63.

5）皆藤章・高橋寛子・川嵜克哲（2009）：風景構成法の事例研究「ある摂食障害女性の心理療法過程」第2節　ケースカンファレンス，現代のエスプリ　風景構成法の臨床，(505),至文堂，182－202.

6）中澤潤・杉本直子・中道圭人（2006）：イメージ画に見られる学生の発達、成長、成熟の概念の違い，千葉大学教育学部紀要，第54巻，159－165.

7）日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会（2010）：学生相談ハンドブック，学苑社.

8）佐々木玲仁（2005）：風景構成法研究の方法論について，心理臨床学研究，第23巻，第1号，33－43.

9）佐々木玲仁（2007）：風景構成法に顕れる描き手の内的なテーマ　その機序と読み取りについて，心理臨床学研究，第25巻，第4号，431－442.

10）渋川瑠衣・松下姫歌（2010）：大学生における自己の変動性・多面性の概念について－学生相談における臨床的理解と意義の視点から－，広島大学心理学研究，第10号，171－183.

11）高石恭子（2009）：現代学生のこころの育ちと高

等教育に求められるこれからの学生支援，京都大学高等教育研究，第 15 号,79－88.
12）高橋寛子（2009）：風景構成法の事例研究　第 1 節　摂食障害女性の心理療法過程，現代のエスプリ　風景構成法の臨床，(505),至文堂，155－181.
13) 山崖俊子（2005 年）：風景構成法における「道」と「川」の描かれ方の発達的検討．小児の精神と神経，第 45 巻，2 号，183－190.
14）山崖俊子・笠井仁（2006）：風景構成法における「道」と「川」の描かれ方と自我同一性達成との関係について，津田塾大学紀要委員会，169－186.
15）吉田昇代（2006）：展望　学生相談と私，学生相談研究，第 27 巻，161－168.
16）和田百合子・桑守正範・薬師寺明子（2011）：大学生の心理的な悩みとその克服における特徴－美作大学地域生活科学研究所こころのシンポジウムパートⅠの結果と考察－美作大学・美作大学短期大学部紀要，第 44 号，56 号，35－48.

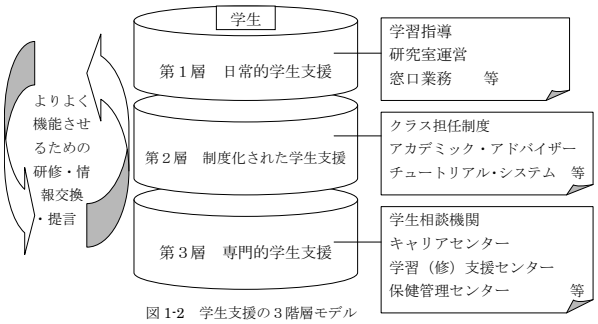

図 1-2　学生支援の３階層モデル

出典：独立行政法人日本学生支援機構　大学における学生相談体制の充実方策について
―「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」―(平成 19 年 3 月)

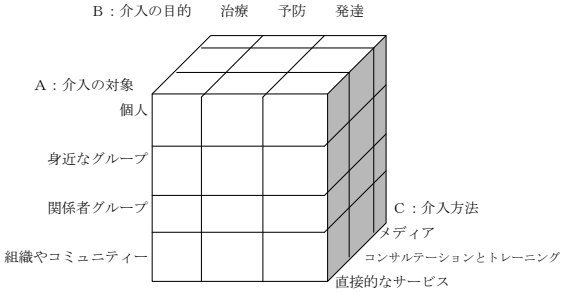

図 1-3　The Cube Model

出典：*Morrill. W. H., Oetting. E. R. and Hurst, J. C. 1974 Dimensions of Counselor Functioning. Personnel and Guidance Journal. 52.354-359.* より作成